

頭皮の痒み・炎症・フケ治療

— 治療法×治療薬



安部正敏 (札幌皮膚科クリニック院長)

本コンテンツはハイブリッド版です。PDFだけでなくスマホ等でも読みやすいHTML版も併せてご利用いただけます。

▶ HTML版のご利用に当たっては、PDFデータダウンロード後に弊社よりメールにてお知らせするシリアルナンバーが必要です。

▶ シリアルナンバー付きのメールはご購入から3営業日以内にお送り致します。

▶ 弊社サイトでの無料会員登録後、シリアルナンバーを入力することでHTML版をご利用いただけます。登録手続きの詳細は<https://www.jmedj.co.jp/page/resistration01/>をご参照ください。

▶ 登録手続

Introduction ————— p2

1 頭皮の痒み・炎症・フケ治療とは何か？ ————— p4

- (1) 湿疹・皮膚炎群
- (2) ドライスキン
- (3) 尋常性乾癬
- (4) 脂漏性皮膚炎
- (5) 真菌症など

2 治療法の選択 ————— p12

- (1) 副腎皮質ステロイド外用薬
- (2) 活性型ビタミンD₃外用薬
- (3) その他

3 基剤の使い分けの注意 ————— p19

- (1) 外用薬の構造
- (2) 外用薬の基剤

4 基剤の使い分けの実際 ————— p21

- (1) 副腎皮質ステロイド外用薬の使い方
- (2) 抗真菌薬配合シャンプーの使い方
- (3) 配合薬の使い方
- (4) 保湿剤などの使い方

5 日常生活指導 ————— p25

▶ HTML版を読む

日本医事新報社では、Webオリジナルコンテンツを制作・販売しています。

▶ Webコンテンツ一覧

Introduction

1 頭皮の痒み・炎症・フケ治療とは何か？

- ・一言に頭皮の痒み・炎症・フケといっても、そもそもこれらの症状を呈する皮膚疾患は山ほどあり、鑑別しなければならない。
- ・最も多くみられるのは“湿疹・皮膚炎群”であるが、その中には、アトピー性皮膚炎、接触皮膚炎、急性湿疹、慢性湿疹、脂漏性皮膚炎など様々な病態が含まれる。
- ・尋常性乾癬など湿疹以外の疾患もみられることから、正しくアセスメントを行い、診断を確定した上で治療を行う。

2 治療法の選択

- ・最も多くみられる疾患である湿疹・皮膚炎群に対しては、副腎皮質ステロイド外用薬が第一選択となる。掻痒が強い場合、必要に応じて抗ヒスタミン薬内服なども行う。
- ・尋常性乾癬においては、副腎皮質ステロイド外用とともに活性型ビタミンD₃外用が奏効する。近年では両者の配合薬が使用可能となり、有用性が高い。
- ・脂漏性皮膚炎においては、その発症メカニズムから抗真菌外用薬が有用である。ただし、本疾患は皮膚表在性真菌感染症ではないため、生活指導には十分注意する。
- ・高齢者やアトピー性皮膚炎患者は、脂漏部位である頭皮でも乾燥傾向となる場合もあるため、適時保湿薬を使用する。

3 基剤の使い分けの注意

- ・頭皮は当然毛髪があるため、外用が比較的困難な部位であり、アドヒアランスが低下する傾向にある。この場合、漫然と油脂性基剤である軟膏で治療するのではなく、様々な基剤を駆使して治療に当たるべきである。

- ・ただし、基剤によっては使用してはいけない皮疹があるため、皮疹のアセスメントができない場合、特殊な基剤の使用は避けるべきである。

4 基剤の使い分けの実際

- ・基本は副腎皮質ステロイドローションである。
- ・その他、軟膏、クリーム、ゲル、フォームなどがあり、患者の好選性を考慮して選択する。成人例においては副腎皮質ステロイド外用薬が第一選択となる場合が多い。ただし、病変部位に応じた強さの使い分けが必要である。

5 日常生活指導

- ・患者によっては、一時的な瘙痒軽減を狙ってトニックシャンプーを過剰に使用したり、洗髪を行わないなど、誤ったスキンケアがみられる。
- ・外用アドヒアランスの悪い頭部病変において、日常生活習慣に治療を組み込むことは有用であり、副腎皮質ステロイドシャンプーの使用なども積極的に考慮すべきである。

伝えたいこと…

頭部が痒いからといって、即湿疹と判断し、副腎皮質ステロイド外用を行うのは避けるべきである。鑑別疾患を挙げ、皮疹をアセスメントした上で、外用アドヒアランスを向上させる治療法を選択する姿勢が重要である。

1 頭皮の痒み・炎症・フケ治療とは何か？

頭皮の痒み・炎症・フケ治療を理解するためには、まず頭皮で起こる種々の皮膚疾患を理解しなければならない。中でも湿疹・皮膚炎群は最も患者数が多く、ありふれた皮膚疾患であり、皮膚科専門医以外も遭遇することが多いと思われる。まず、頭部病変をみた場合に鑑別すべき疾患を挙げる(表1)。

表1 頭部病変から鑑別すべき疾患

1) 痒み, 鱗屑, 紅斑	3) 痒みと膨疹
接触皮膚炎	蕁麻疹
慢性湿疹	虫刺症
脂漏性皮膚炎	4) 痒みと丘疹
尋常性乾癬	毛じらみ
扁平苔癬	疥癬
頭部白癬	5) 痒みだけで皮疹なし
皮膚筋炎	皮膚癌痒症
red scalp syndrome	心因性
2) 痒みと脱毛	全身性疾患に伴うもの
円形脱毛症	代謝性疾患: 糖尿病, 甲状腺機能異常, 副甲状腺機能異常
壮年性脱毛症	肝疾患: 肝炎, 原発性胆汁性肝硬変, 胆汁鬱滞
休止期脱毛症	悪性新生物: ホジキン病, 菌状息肉症, 各種臓器癌
frontal fibrosing alopecia	血液疾患: 鉄欠乏性貧血, 多血症, ヘモクロマトーシス
中枢性遠心性瘢痕性脱毛症	感染症: HIV, 肝炎ウイルス
円板状エリテマトーデス	その他: 脾炎, 妊娠
alopecia mucinosa	

(1) 湿疹・皮膚炎群

そもそも, “湿疹”とはきわめて当を得た病名である。“湿った発疹”であるから“湿疹”なのであるが, まさにこの“湿”の一文字にこの疾患のエッセンスが凝集されていると言っても過言ではない。皮膚科学においては“湿疹・皮膚炎群”とひとまとまりにされることが多いが, これはそもそも同じ病態を指す。しかしこれまでの慣例から, “接触皮膚炎”

とは言うが“接触湿疹”とは言わない。“アトピー性皮膚炎”と言うが“アトピー湿疹”は一般的ではない。“湿疹”は臨床所見を忠実に表現した病名であり，他方“皮膚炎”は病態論からみた病名である。

湿疹の定義は，いわゆる“湿疹三角形を満たすもの”と考えると理解しやすい(図1)。さらに，この要点である①掻痒，②多型性，③点状状態，の3点を満たすことが重要である。つまり，“痒い”というきわめてありふれた主訴は必須と考えてよいが，それだけで湿疹と診断することはできない。多型性とは，多数の皮疹が同時に存在することであり，点状状態と表現される細かい皮疹，つまり丘疹や小水疱などからなる状態である(図2)。この小水疱は漿液性丘疹と呼ばれ，特に湿疹の原因として多い接触皮膚炎においては非常に重要な所見である。これは，皮膚炎によりリンパ球をはじめとする炎症細胞が表皮内に浸潤することにより，表皮細胞がバラバラになってしまう結果，生ずる発疹である。当然，漿液性丘疹は容易に破裂してしまうため，表面が湿潤した状態，つまり“湿疹”となるのである。

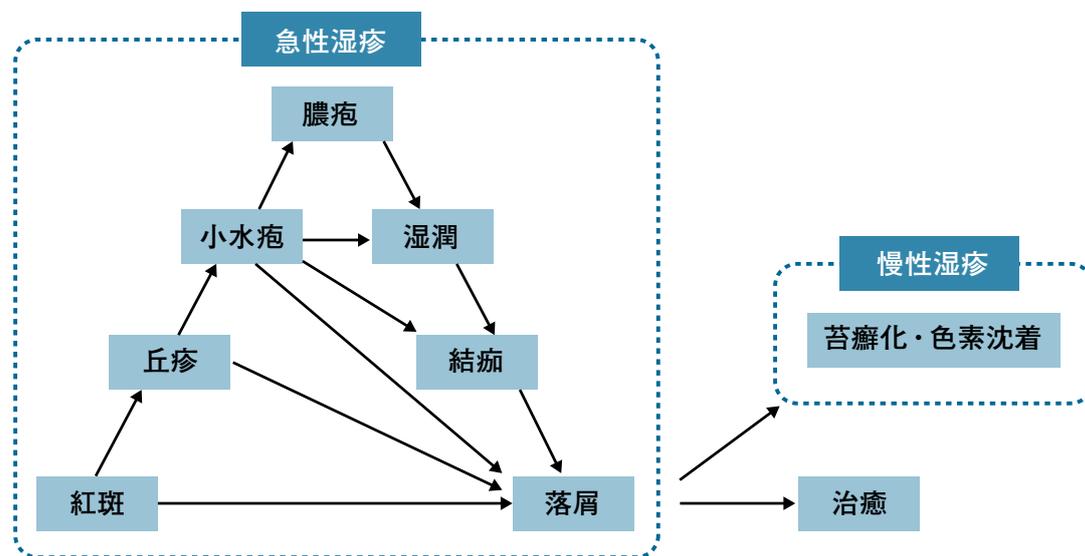


図1 湿疹三角形